

[教育方法一般]

「対話能力」を育む指導の工夫

－国語科と総合的な学習の時間を関連させた螺旋反復的な学習過程の実践から－

金子 和宏*

1 研究の意図

国語科「話すこと・聞くこと」の領域において、ディベートやパネルディスカッションなどを取り入れながら指導を進めてきた。これらの活動によって話し合いは活発化し、話し合いの進め方も上達した。しかし、総合的な学習の時間（以下総合学習）においてパネルディスカッションやポスターセッションといった他者と意見を交流する活動を行うと、発言に対する質問の内容がかみ合わなかったり、質問に対する答えが不十分であったりする児童が多く見られ、意見をかみ合わせながら議論を深めたり今までにはなかった考え方やより深い理解に到達したりするには至らなかった。

実際に他者と自己の考えを交流する場面では、話す力や聞く力だけでなく、思考力や相手を理解しようとする意欲、自分への自信や他者への敬意など様々な要素が必要とされることに気が付いた。私はこのような力を村松（2001）が示した「対話能力」と捉えた。村松は「対話能力」を「異なる意見をかみ合わせて高次元の理解を共有できるようにすることであり、情意面、技能面、認知面を統合した力ととらえられる。」¹⁾と述べ、その各要素を学年部ごとに示している。これらを培うためには習得・活用・探究の流れの中でそれぞれの力を高めていく必要がある。特に情意的要素を培うためには、技能的要素や認知的要素を自己の課題追求のために意欲的に活用していくことが必要であると考えた。

平成20年1月の中央教育審議会答申に「基礎的・基本的な知識・技能の定着やこれらを活用する学習は、教科で行うことを前提に、体験的な学習に配慮しつつ、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習、探究的な活動となるよう充実を図る。このような学習活動は、子供たちの思考力・判断力・表現力等を育むと共に、各教科における基礎的・基本的な知識・技能の習得にも資するなど教科と一体となって子供たちの力を伸ばすものである。」²⁾とある。このことから、国語科と総合学習の指導計画をもっと密接に関連させながら指導を進めていくことで、情意面、技能面、認知面それぞれを統合し「対話能力」として身に付けていくことが可能になると考えた。そこで、子供たちの「対話能力」の育成を目指して、国語科と総合学習の指導を螺旋反復的に関連させた指導計画を作成し指導することによって、国語科と総合学習の特性を引き出し、合理的かつ相乗的な効果を生む指導が展開できると考え実践を試みた。

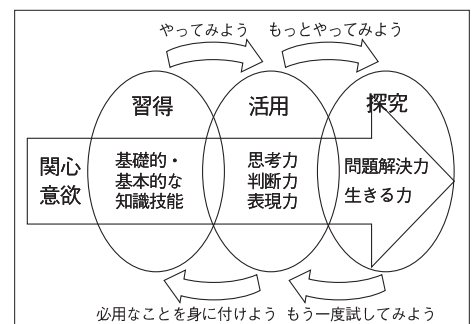
2 研究の目的

本研究の目的は、国語科と総合学習を螺旋反復的に関連させた学習過程が「対話能力」の育成に効果的であったかを考察することにある。

3 研究の構想

(1) 学習過程における「習得」「活用」「探究」の関係

教科と総合学習を関連させた学習過程における「習得」「活用」「探究」の関係をイメージし【図1】のように表した。まず、基礎的・基本的な知識技能の習得の前に、知識や技能を習得する必要性や活用する目的をしっかりとつことが大切であると考えた。さらに、到達したいゴール（目標や課題）をはっきりさせることも必要になってくる。これらは、子供たち一人一人に自らの課題としてしっかりと自覚される必要がある。そのために、総合学習の課題や追求活動と結び付け、総合学習の中で一人一人に醸成される関心・意欲や課題意識を教科の学習につなげていくのである。このような高い



【図1：習得・活用・探究の関係】

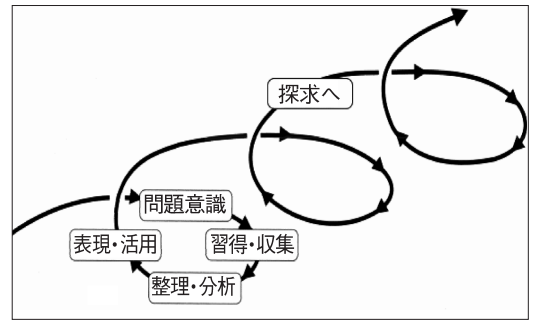
* 南魚沼市立塩沢小学校

関心や意欲に支えられながら習得した知識や技能を総合学習の課題解決に生かしていくことができると考えられる。また、「習得」「活用」「探究」の流れはただ一方向に向かうのではなく、様々な学習場面で「習得」「活用」「探究」を繰り返しながら、確かな学びへと進んでいく追求活動の営みが生じてくると考えられる。

(2) 螺旋反復的な学習の流れをつくる

小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編に示された「探究的な学習における児童の学習の姿」³⁾を参考に本研究における学習の流れのイメージを【図2】に示した。基礎的・基本的知識技能を習得し、活用しながら探求へと向かう過程を表している。

問題意識とは、体験的な活動を通して自らの課題を設定し、目標を定めることである。習得・収集とは、必要な知識や技能を習得したり情報を収集したりすることである。整理分析とは、収集した知識・技能や情報を思考しながら整理したり分析したりすることである。表現・活用とは、自ら判断しながら知識・技能を活用したり気付きや発見、自分の考えなどを表現したりすることである。これらを螺旋的・反復的に繰り返しながら課題を追求し、探求へと向かっていく。



【図2：螺旋反復的な学習の流れ】

(3) 「対話能力」の要素を指導計画に生かす

「対話能力」を具体的に把握するために、村松（2001）が示した情意面、認知面、技能面の各要素とその内容（高学年）⁴⁾を【表1】に表した。この各項目は学習過程の中にどのような学習活動を位置付けるかを考える際の手がかりとなり、評価の際の手がかりともなる。ただし、あくまでも子供たちの実態に応じて各要素の項目が指導計画内に設定されるべきであり、その全てを必修とするものではない。

【表1：高学年の「対話能力」を構成する要素】

情意的要素	認知的要素	技能的要素
①対立を恐れず、論理的に話し合うことの価値を理解する。 ②大きな一致点を探す気持ちで話し合う。 ③納得するまで問い返す。 ④自分の意見に対する批判を冷静に受けとめる。 ⑤当事者意識をもって粘り強く話し合う。 ⑥自分の言葉に責任をもつ。 ⑦相手の意見を尊重する。	1 思考力 ①物事の成り立つ条件をとらえる。 ②類推によって物事を想定する。 ③仮定推理によって蓋然的に判断する。 ④仮説を立て、それを証明する。 ⑤物事の相関的な関係をとらえる。	1 聞く力 ①話の内容を分類して聞く。 ②内容や根拠「結論を生み出す過程」を吟味して聞く。 ③話の内容をまとめながら、相手の意図を理解しようとして聞く。 ④事実と意見を区別して聞く。 ⑤相手がどのような前提に立って話しているかに注意して聞く。 ⑥聞きながら自分の意見がまとめられるようにする。 ⑦話の先をある程度予測して聞く。
	2 内容知 ①討論の社会・文化的意義を理解する。 ②討論の弁証法的性格を知る。 ③対話におけるフィードバックの重要性を認識する。 ④論理的思考の諸様式を理解する。	2 応じる力 ①相手の発言内容を一般化する。 ②相手の発言内容を詳しく述べ直す。 ③相手の発言の曖昧な点を明確にする。 ④相手の発言に自分の経験などを付け加えて拡張する。 ⑤話を転換し、違った視点を打ち出す。
	3 方法知 ①ディベートの進め方。 ②パネルディスカッションの進め方。	3 話す力 ①聞き手の理解力に合わせて話す。 ②論理関係を明らかにして話す。 ③重要な概念は定義して話す。 ④相手の気持ちを配慮した反論の言い方をする。
		4 はこぶ力 ①計画的に話し合い、目的から外れた時は途中で軌道修正する。 ②論点がずれないように話そうとする。 ③話の内容を深めるように話そうとする。 ④途中で、それまでの話をまとめながら話し合いを進める。

4 実践の概要

(1) 国語科と総合学習を横断的に関連させた指導計画づくり

指導計画については、国語科の単元「討論会を開こうー考えを深めるためにー」と総合学習のテーマ「めざせ！下条の縄文人」の中の「縄文子どもフォーラムに参加しよう」を横断的に関連させて計画の立案を行った。取扱いについては、国語科と総合学習を横断的に関連させ、同一単元のように指導を進めた。しかし、それぞれのねらい（目標）や指導事項については区別して単元設定を行った。

① 単元名

国語：「討論会を開こうー考えを深めるためにー」（みんなと学ぶ小学校国語六年下 学校図書P38～P43）

総合：「めざせ下条の縄文人ー縄文子どもフォーラムに参加しようー」

② 単元の目標

- 〈国語〉 ○テーマについて調べたことをもとにして、提案し合うことができる。
○パネルディスカッションの方法について理解し、役割を決めて話し合うことができる。
- 〈総合〉 ○追求の成果をポスターや論文にまとめ、発表することができる。
○学習のまとめや発表を通して自分の生活について振り返ると共に、自己の考えを深めることができる。

③ 指導計画（国語8時間 総合的な学習の時間7時間 計15時間）6年生 25名（男子13名 女子12名）

	国語で扱う学習内容（8時間）	学習の過程（時間）	総合学習で扱う学習内容（7時間）
関心意欲	○教科書を読んだりビデオを見たりして、パネルディスカッションやディベートのやり方を理解する。【認知3-② 2-①】	(2~4) 習得・収集	○「縄文子どもフォーラム」で他校の子供たちや学芸員らとパネルディスカッションを行うことを知り、自己のめあてや学習の見通しをもつをもつ。
習得	○話し合いのスキルを高め、多様な考えを引き出すために、小グループでディベートを行う。 ・話し合いの要点を学習シートにまとめることで聞く力を高める。【情意①②⑦ 認知1-① 3-① 技能1-③⑥ 2-③④⑤ 3-①④ 4-①~④】	(5) 整理・分析	○ポートフォリオをもとに自分の考えを構造化する。 ・内容を分類・整理し、伝えたいことを明らかにする。 ・伝えたいこと（結論）に対する根拠を明らかにする。 ・事実（経験）と意見（主張）を区別する。 ・構成メモに、文章の構想を表す。 (テーマごとのグループに分かれて作業を行う) 【認知1-①⑤ 技能1-①②④ 3-②】
活用	○構成メモをもとに、文章で考えを表現する。 【認知1-①③ 2-②④ 技能3-②③】 ○小グループでパネルディスカッションを体験する。 ・学習シートを用いて発言の趣旨を確認する。 ・話し合いの要点を学習シートにまとめることで聞く力を高める。 ・発言の意図をとらえて自己の意見を発言する。 【情意①②⑥⑦ 認知1-①④ 3-② 技能1-②~⑥ 2-②~⑤ 3-①~④ 4-①~④】	(6~8) 表現・活用 (9~10) 整理・分析	○発表を補強する、イラストやアンケートの集計、キーワードのフリップなどを準備する。 ○友達と読み合いながら、考えが伝わる文章になるように推敲する。【情意1-⑥ 技能3-①】
探究へ	○学年でパネリストとフロアに分かれて討論を行う。 ・友達との意見の交流を通して、気付いたことをまとめていく。【情意①~⑦ 認知1-①~⑤ 2-①~④ 3-② 技能1-①~⑦ 2-①~⑤ 3-①~④ 4-①~④】	(11) 表現・活用 (12~14) 問題意識	○「縄文子どもフォーラム」で他校の子供たちや学芸員らと交流する。【情意①~⑦ 認知1-①~⑤ 2-①~④ 技能1-①~⑦ 2-①~⑤ 3-①~④ 4-①~④】 ※縄文子どもフォーラムは、火焰街道博連携プロジェクトに参加する複数の学校が一堂に集い、総合学習の成果を発表し合う学習活動である。パネルディスカッションやポスターセッション等を行う。
	○振り返る。 ・自己評価をもとに感想を話し合う。 ・互いの良さを交流し、考えの深まりを確認する。 ・相互評価をもとに感想を書く。	(15) 整理・分析	

指導計画中の矢印は、学習の流れを示し、「問題意識」「習得・収集」「整理・分析」「表現・活用」が螺旋反復的に指導されながら「探究」へ向かっていくことを表している。また、「対話能力」を構成する要素についても指導計画に明記し、指導の過程でどのような力を育てていくのかを示した。本来の国語科では6時間扱いの単元である。その中で、パネルディスカッションの方法を理解し、テーマを決めて取材を行い、自分なりの意見文を書き、討論会を行わなくてはならない。しかし、総合学習と横断的に関連させたことにより、国語科、総合学習双方の時数増加を抑えながらも、内容を充実させ、かつ螺旋反復的な指導を可能にするゆとりを生み出すことができた。これらによって、効果的に「対話能力」を身に付けさせることができると考えた。

(2) 螺旋反復的な流れで展開する学習活動

① 習得・収集：聞く力に視点を当てた指導

小学校学習指導要領解説国語編の聞くことに関する指導事項に「高学年では、話し手の意図をとらえながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめること。」⁵⁾とあるように、討論が成立するためには、発言者の意図や考え方を聞き取らなければならない。また、深まりのある討論に発展させていくためには、批判的に聞き、話の論理性を正しく聞き取る力が必要となる。そこで、4人~5人のグループを二手に分け、グループごとにそれぞれ相対する立場に分かれてディベート形式の討論【図3】を行った。このようなディベート形式の討論では、初期段階の傾向として、話すことに熱中してしまい、相手の意見を聞き取ることがおざなりになることがある。しかし、学習のねらいは聞き取りの力を高めることにあるため、学習シート【図4】を用いて聞くことに子供たちの意識を向けるようにした。



【図3：グループ討論の様子】

テーマは「縄文時代と現代を比べてみよう」である。話題は「自然環境」「平和」「人とのつながり」「ものを大切に作る心」「根気強さ」「生活」を設定した。これらの話題の中から2つのグループに対して1つの話題を設定し、討論を進めた。子供たちには学習シートを配布し、それぞれの発表の後に相手から聞き取った内容をシートに書き込み、話し合った。最後に評価や感想を書き込み、シートを見せ合いながら互いの話し方・聞き方について振り返った。その後、立場を交代し同じ話題の班同士で相手を入れ替えて再度討論を行った。

聞く力に視点を当てた技能的要素を習得するための学習活動から、相手の意図を理解しようとして聞く姿や、相手がどのような前提に立って話しているかを注意して聞く姿、聞きながら自分の意見をまとめようとする姿など、聞く力の高まりが見られた。さらに、相手の発言の曖昧な点を明確にしようとする態度も芽生えていった。また、情意的要素への効果も現れていた。学習シートを使って質問内容を吟味したことから、対立を恐れず論理的に話し合う姿が見られた。さらに、【表2】の子供の感想の記述にもあるように、話し合いによっていろいろな考え方ができることに気付き、自分の考えが広がっていったことを実感することができた。今回の活動では、討論の内容が単純で自分の意見を短く言い切ることができ、意見や質問が比較的容易であったため、発言が活発化したと考えられる。しかし、今後は様々な考えを論理的に構成し、自分の意見としてまとめていくことや、より複雑になっていく内容から、発言の意図を的確にとらえて応えていくことなどが課題となった。

② 整理・分析：情報を整理分析し、論文の構想を練る

総合学習で学んだことを自分なりの考えとして意見文にまとめる準備の段階として、文章の構想を構想メモに表した。【図5】のように、活動のたびに書き溜めたレポートやポートフォリオを手がかりに文章の内容や構成を考えさせた。子供たちは書き溜めたレポートから、体験を通して考えたことや縄文時代に対する考え方が変化したことなどを抽出し、自分が一番伝えたいこと（主題）をまとめていった。そして、抽出したレポートにある、自らの体験や調査をその理由（根拠）として付け足していった。この活動から、結論をどのように生み出し、その根拠をどのように見付け、整理していくか分かるようになるなど、認知的要素の高まりが見られた。

③ 表現・活用：学習の成果を論文として表現する

自分の考えを整理し、発表内容を構築していく上で、文章に表現していくことは有効な手だてと言える。国語教師用指導書解説編にも「文章化することで自己の意見の客観的な正しさを確かめることもできるし、考えを整理したり、説得力のある表現を工夫したりすることもできる。」⁶⁾と書く活動の重要性を強調している。確かに、文章に表現してから発表した場合と、文章表現をせずに頭の中で構成を考えて発表した場合とでは内容に大きな違いが生じてしまう。また、表現内容への効果だけでなく、書くことによって発表することへの自信や安心などの心理的な効果も得られる。パネラーとして話題提供する場合に発表原稿が大きなよりどころとなるのである。

本単元では、各自が文章で表現した原稿を互いに交換し、助言し合いながら推敲していく活動を行った。そうするこ

振り返り	感想	自分になった考え	評価の理由	なっとく度	質問したいこと	結論に対する根拠	相手の結論（意見）	テーマ
		「縄文時代の方が曲豆がは生きていた。」	「縄文時代の方が曲豆がは生きていた。」	5	「縄文時代の方が曲豆がは生きていた。」	「縄文時代の方が曲豆がは生きていた。」	「縄文時代の方が曲豆がは生きていた。」	縄文時代と現代の生活

【図4：学習シート】

【表2：振り返りによる子供の感想（筆者抜粋）】

- いろいろな考え方が出てきて面白かった、自分の考えが広がったと思う。(A男)
- どうしたら相手に自分の考えがちゃんと伝わるかよく考えるようになった、次は結論を先に言ってその後理由を1とか2とか言いながら言いたいです。(B男)
- 相手の話でよく分からないところは、はっきりしないことや意見と理由が分からないことなると分かりました。なので何を質問すればいいか分かるようになりました。(A子)
- 質問されたときはくわしい気持ちになったけれど、どう言ったら分かってもらえるかがんばって考えました。今度は、ちゃんと分かってもらえるように話したいです。(B子)



【図5：構想メモを書く子供】

とで、聞き手を引き付け納得させる文章表現に高めることや相手の意見を分かろうとする共感的な態度を育てることができると考えたからである。しかし、友達の良い表現を自分の原稿に取り入れたり、表記の誤りや言い回し方についての助言をしたりすることはできたものの、聞き手を引き付ける文章表現に高め合うまでには至らなかった。むしろ、指導者が原稿を読み、書き手の子供と話し合い、表現の意図や訴えたい思いを聞き取り、助言をしては書き直す作業を重ねていくことで内容や表現を高めていったと言える。ただし、原稿を読み合う中で、互いに曖昧な箇所や結論に対する根拠として不備に思う箇所などを質問し合う姿や、「そうだね。その気持ち分かる。」などと共感的な態度で感想を言い合う姿が多く見られた。これらの活動を通して書き上げた子供の作品の一つを以下に例示する。

K男

縄文人と現代人を比べて

縄文時代は現代と比べると、科学技術はおとっているけれど、彼らの知恵と工夫、そして人々との協力によって、約一万年もの長い間、自然と共に生活を営んでいました。

現代の子供たちの間では、いじめやけんかなどいろいろな問題が起こっていますが、縄文時代にはなかったのではないかと思います。さらに、現代では、大気汚染や地球温暖化などの環境問題をかかえています。縄文時代は豊かな自然に囲まれ、すばらしい地球環境の中で生きていたのです。

しかし、縄文時代はよいことばかりではないと思います。ほくは、総合学習の時間に縄文時代の火起こしについて調べたり、体験したりしながら縄文人の苦労やきびしい暮らしについて学びました。

ほくは、はじめは縄文時代では絶対に暮らせないと考えていました。不便で貧しく、つらい生活なんてしたくないと考えていたからです。しかし、体験活動をするうちに、縄文時代の生活に心をひかれるようになりました。当然、現代の生活を全て投げ捨てて、縄文時代の生活をすることはできません。しかし、土器や弓など、様々な発明と工夫を積み重ね、生活を切り開いてきた縄文人の生き方に感動したのです。

ほくは、つらいことや苦しいことから逃げたりあきらめたりすることが何度かありました。でも、縄文人のあきらめない心が生活を支えてきたことに気づき、少しずつ気持ちが変わってきました。

これからは、自分の生活に必要なことは、つらいことでも立ち向かい、あきらめずにやりとげていきたいです。きびしいながらも縄文時代の1万年の間、自然と共に生活を切り開いてきた、私たちの祖先に負けまいとがんばりたいと思います。

④ 習得・収集：パネルディスカッションで意見をかみ合わせる

パネルディスカッションで意見を交換するためには、話題提供者（パネラー）よりも、聞き手（フロアー）に重点をおいて指導を行った。これは、前時の習得収集の場面で課題となった発言の意図を的確にとらえて応える力を身に付けさせるためでもある。パネルディスカッションの性格上、パネラーは発表原稿があらかじめ準備されており、比較的落ち着いて自分の発表を行うことができる。それに対して、フロアーはパネラーの意図をとらえると共に、他者の意見とも絡めながら自分の考えをまとめ、発言しなければ討論は深まらない。

これらのことから、自分の考えをスムーズにまとめられるように学習シートを活用した。シートに「質問」「情報提供」「意思表示」「意見」「感想」の項目を設定し、自分の意見を整理していけるように工夫した。そして、どのように話を組み立てればよいか分からない子供たちには、話し方の例示を参考にさせることで、自分の考えを発言しやすくなると考え、それぞれの項目に具体的な話し方の例【表3】を示して指導を行った。

【表3：話し方の例示】

質 問	発言の内容で、もっと詳しく聞きたいことや疑問に思ったことを聞いてみよう。	情 報 提 供	発言の内容について、自分が知っていることを教えてあげよう。
	～とはどういうことですか。もう少し詳しく説明してください。～の理由を説明してください。別の例をあげて説明してください。		そう考えると～とも言えるのではないのでしょうか。さらに付け加えると、～のような考え方もできると思います。私は、その他に～のような例を知っています。
意 思 表 示	発言に対して、賛成か反対か、またその理由は何かを伝えよう。	意 見 感 想	思ったことや発見したこと、心に残ったことを紹介しよう。
	その考えは違うと思います。わけは～だからです。その考えに賛成です。わけは～だからです。なるほど、その通りです。～の点について賛成です。～の点については賛成できません。理由は～だからです。		私は、今の意見を聞いて～と思いました。～という考えを初めて知り、～と思いました。私は、～が一番心に残りました。なぜかという～
		連 結	他の人に話題をつなげていこう。
			私は、～のように思いますが、みなさんはどう考えますか。みなさんの意見をまとめると、～のようになると思います。

さらに、パネラーや他者の意見と自分の意見を「連結」させて発言することを【図6】のように指導した。実際の討論の場面では必要に応じて討論を一端止め、意見を絡み合わせる発言の仕方や自分の考えをどのように発表していくか、子供たちへ繰り返し指導していった。また、良い話し方ができたときはどこが良かったのか、うまくいかなかったときはどうすると良くなるのかを子供たちに知らせていった。

このような指導によって、子供たちの意見がかみ合い、討論が盛り上がっていくと、「質問されることで、自分の考

えが確かめられたように思いました。」「友達が自分が考えていなかった意見を言ってくれて、そうか!と思いました。」「発言のタイミングが分かってきたら意見を言うことが楽になりました。」などの感想が出されるようになった。このように、友達と意見を交換することへの意欲が増し、自分の考えが深まっていくことを実感できるようになってきたことから、「対話能力」が高まっていると判断した。

⑤ 探究：実践場面での活用

本実践において総合学習のまとめの活動として位置付けた「縄文子どもフォーラム」【図7】では、200人を越える子供たちの中で、活発な討論を繰り返すことができた。フォーラム後の感想にもパネルディスカッションやポスターセッションで自分の思いを表現したり他校の子供たちと意見を交換したりすることに充実感や達成感を感じている子供が多くいることが分かった。今回の実践で、子供たちが対話能力を高め、自信をもってフォーラムに参加したことが活発な議論や充実感の獲得につながった一因であろうが、今までの総合学習で追求してきた自己の学びを知らせたい、分かってもらいたいという強い思いがあったことも大きな要因となっているであろう。言い換えれば、他者に伝えたいという思いを醸成できたことが、本実践での子供たちの「対話能力」の向上につながったとも言える



【図6：発言をかみ合わせるための指導】



【図7：縄文子どもフォーラム】

5 考察・まとめ

本実践では「対話能力」の育成に視点を置き、国語科と総合学習を関連付けて指導を行った。総合学習で行った調査や体験など、様々な追求活動によって深まっていった自己の考えや知識、「縄文子どもフォーラム」での発表に向かう意欲が本単元の学習活動を支えていたと考える。また、このことは「問題意識」「習得・収集」「整理・分析」「表現・活用」の各活動場面で「習得」と「活用」を細かく繰り返させる原動力となることが分かった。例えば、構成メモをもとに、自分の考えを文章で表現する学習活動では、自分の考えを表現した文章をもとに、小グループでパネルディスカッションを行った後、再度ポートフォリオを見返しながら構成メモに書き加えて文章を書き直す姿が見られた。また、このような関心や意欲は情意的要素の習得に大きく影響したと考えられる。「分かってもらいたい」「分かりたい」という気持ちが高まっていくと共に「今の部分をもう一度説明してください。」「この部分については同じ考えですが、他の部分は違う考えです。」というような意見が聞かれるようになっていった。さらに、その情意的要素が、聞く力・話す力などの技能的要素や思考力・方法知などの認知的要素の向上を助けたと考える。このように、「問題意識」「習得・収集」「整理・分析」「表現・活用」の各活動場面で「習得」と「活用」を細かく繰り返しながら螺旋反復的に学習活動が進んでいく過程の中で「対話能力」が培われていったと考える。

今回の実践では、「対話能力」が総合学習において自己の考え方を発展深化させるために効果的に作用しているかについては分析できなかった。今後は、総合学習における「対話能力」の働きについて研究し、自己の考えを互いに発展深化していけるような交流活動の展開を目指していきたい。

引用文献

- 1) 村松賢一『対話能力を育む話すこと・聞くことの学習』明治図書、2001、P51、P79
- 2) 中央教育審議会答申『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について』平成20年1月、P130
- 3) 小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編、文部科学省、平成20年8月、P13
- 4) 前掲書1) P151
- 5) 小学校学習指導要領解説国語編、文部科学省、平成20年8月、P14
- 6) みんなと学ぶ小学校国語六年下 教師用指導書解説編、学校図書、P75